

東金に名を残した人々

日殷上人 にちいんしょうにん

日殷上人は享禄元年（一五二八）京都に生れ、幼い時にお寺に入り、僧となるため修業し、成人してからは諸国を巡り「法華経」を広め、房総地方にも訪れ、本漸寺の住職もつとめました。

多くの寺院の改宗・復興・創建に努力し、その功績をかわれて、京都妙満寺二十五世となり、天正十一年（一五八三）には、正親町天皇より大僧正に任ぜられました。その後再び、本漸寺二十五世となり東金へ帰ってきました。

「身近に感じる東金の歴史」の章にある、「北条伝馬手形」は、この時のもので大変貴重であり、また日殷上人が大変社会的に認められていたことを示しています。

日殷上人は天正十八年（一五九〇）に六十四歳で亡くなりました。

松之郷の字八坂台の山中に櫛の大木を背にして、享保十年（一七二五）ごろに建てられた供養碑があります。

天保年間（一八三〇～一八四三）には、この供養碑にお参りすれば、願い事が何でもかなうという民間信仰がおこり、露店やおこもり堂まで出来たそうです。

地位の高い僧だった日殷は、土地の人々に親しみをもたれ、その墓が御林というところにあることから、「御林の大僧正様」と呼ばれていました。



日殷上人の墓

北条伝馬手形…身近に感じる東金の歴史 60 ページ

民間信仰…世間に伝承されている、神や仏を大切にうやまうこと

日乗上人

市東刑部左衛門が非業の死をとげた時、刑部左衛門には八太郎（後の日乗上人）という八歳の男の子がおりました。捕方はこの八太郎まで、罪人の子として懸命にさがしました。そこで、村人は八太郎を酒蔵の布留川家の城跡の空堀の中にかくしました。さらに本漸寺に移したのですが、捕方は本漸寺までもさがしに来てしまいました。

その時、八太郎と同年齢ぐらいの小坊主があやしまれましたが、「一切経」の経文を唱えさせたところ、見事に唱えたといえます。この小坊主こそ、一晩で経文を覚えた八太郎だったのです。

この後、八太郎は修業にはげみ十八歳で僧正になり、宮谷壇林（大網白里町）の学頭をつとめたり、京都妙満寺の貫主権律師や上野寛永寺の学頭となつて、経巻数百巻とたくさんの本を読み、自分も本を書きました。

やがて本漸寺に帰つて来て、住職の地位につきましたが、正保二年（一六四五）に四十八歳で亡くなりました。

本漸寺には、明治四十二年（一九〇九）に日乗上人（養徳院乾龍）を記念して設けられた「乾龍文庫」（養徳文庫）があります。

また、布留川家の屋敷内にある円蔵寺には、日乗上人が、村人を集めて仏の道を説いたという「乗師堂」があります。

市東刑部左衛門…東金に名を残した人々 89 ページ
非業の死…思いもかけない災難によつて、死ぬこと

嶋田伊伯しまだ いはく（徳川幕府東金代官・雄蛇ヶ池造成者）

嶋田伊伯は、東金の代官を文禄元年（一五九二）から慶長十九年（一六一四）まで、二十三年間もつとめた人物で、東金の発展のため大切な仕事をした人です。

そのころの房総地方は、慶長六年（一六〇一）の大地震が発生して、九十九里沿岸一帯は、津波の被害を受け、多くの家や人の命がうばわれました。東金も、千ばつなどの被害を防ぐため「ため池」（用水池）を造ろうということになり、代官嶋田伊伯を中心に築造計画が立てられ、慶長七、八年（一六〇二、三）頃、「おんじや谷」に造ったかどうかということになりました。そのころの東金は、江戸幕府の天領となっていたので、伊伯の計画案を採用した工事は幕府の事業として進められることになり、工事の費用も幕府が出してくれることになりました。

さらに慶長九年（一六〇四）頃から、慶長十七年（一六一二）頃までは、異常気象により各地で洪水やひでりが続き、米などの作物は出来ず、ききんによる村人の苦しみは続きました。

そのころは、今の雄蛇ヶ池のある所には、田畑や人家があり、養安寺村（現大網白里町）字「おんじや谷」といわれる「谷」で、養安寺村の村人二十軒ほどが暮らしていたのです。この人たちを、どこか他へ移転させなければならず、解決までいろいろな問題がありました。が、やっと話しあいがついて、山口村の一部に移転しても

千ばつ…長い間雨が降らず、水が
かれること。ひでり

天領…江戸幕府直轄の領地

ききん…農作物がみのらず、食
物が不足して飢え苦しむこと

らうことになり、その土地の買いあげには、水下九ヶ村（山口・田中・福俵・台方・辺田方・押堀・川場・堀上・大豆谷）が金を出しあうことになりました。家の建てかえのための費用も負担しました。

慶長九年（一六〇四）いよいよ工事が始まりました。谷が割合深く清水がわいており南東側が低いので、そこに堤防を築いて水を止め、池にすることによって工事は進められました。

当時の幕府は、開拓に非常に力を入れており、農業施設の整備には資金をおしまずに取り組んでいました。特に、代官には、そのための専門知識が必要とされていたのですが、伊伯にもかなりの知識と技術力があつたものと考えられます。

伊伯の代官時代は、戦乱の時代から平和な時代への過渡期で、雄蛇ヶ池・谷池など用水池を造るには困難な時代でしたが、伊伯の指導力、地域の人々の協力により、十年もかかってようやく完成したのです。村人待望の「ため池」ができたのです。人々の喜びは大変なものだったでしょう。

伊伯はこの「ため池」を「おんじや谷」にちなんで、「雄蛇ヶ池」と名づけました。その後も改修が加えられて現在まで利用されています。水下九ヶ村がくじ引きで水を引く順番をきめて、午前六時から翌朝五時までの、一昼夜ずつ水を引くことなどが決められていました。

伊伯は、将軍の鷹狩りの時の東金御殿を建てたり、前のくぼ地を「ため池」に造



雄蛇ヶ池

過渡期…旧いものから新しいものへと移っていく途中の時代

改修…改め直すこと

成して八鶴湖（そのころは大池とか御殿前池とよんだ）を、けいちよう慶長十九年（一六一四）に造り、水田百ヘクタールの用水池としたのです。

けいちよう慶長十九年（一六一四）十月、大坂冬の陣があった時、伊伯は七十一歳でしたが参陣して、さんじん將軍秀忠の側近くで御旗奉行をつとめ、徳川方は勝利をおさめました。
げん元和元年（一六一五）五月、大坂夏の陣の終りにより、戦国時代は幕を閉じたのでした。

伊伯は、手柄をたてたことにより遠江国（静岡県）に二千石の領地を与えられましたが、父の住んだ武蔵国（埼玉県）坂戸へ替地してもらいました。嶋田一族は、

徳川家に信頼され、初代江戸町奉行や大坂町奉行や長崎奉行などをつとめました。

伊伯は坂戸に住んで法号を「以栢」とし、寛永十四年（一六三七）九月一日九十歳で亡くなりました。以伯は、東金へ代官となつて来る前に建てた菩提寺の長溪山永源寺の嶋田一族の墓地に眠っています。

また、雄蛇ヶ池のそばに、伊伯をまつる水神社があります。

義人・市東刑部左衛門と大多和四郎衛門

日吉台六丁目の木戸公園に木々に囲まれた、義人市東刑部左衛門の塚があります。かつては黒田台の山中にひっそりとまつられていました。

東金酒井氏が滅びた後、市東刑部左衛門（一五七四～一六〇五）は村のまとめ役の



義人…正義感の強い人のこと

水神社

替地…土地を取り替えること

名主^{なぬし}でした。

その頃、慶長^{けいちょう}十年（一六〇五）は、九十九里平野^{だいなん}一帯、大千^{ちせん}ばつにみまわれ作物はみのらず、ききんとなつて人々を苦しめていました。その年、農地の面積や作物の品質を調べ年貢^{ねんぐ}の量を決めるためにやつてきた検田使^{けんてんし}という役人に、市東刑部左衛門はむこう二ヶ年間の年貢米^{ねんぐまい}の取立てを止めて、幕府^{たくりふ}が蓄えてあるお米を農民に分け与^{あた}えてもらえるようお願いしました。ところが、検田使は逆に年貢を二割増に納めるよう命じ、さらに市東刑部左衛門をのしつたりしました。

さすがの市東刑部左衛門も耐^たえ切れず検田使を切り殺し、米倉を開放して村人に米をわけてしまいました。そして、その責任を取るために八鶴湖畔にある最福寺の門前で切腹^{せつぷく}しました。三十一歳でした。

村人たちはひそかに市東刑部左衛門の遺体^{いたい}を運び出し、旧丘山村黒田境の地に埋めて塚を作り、永く義人市東刑部左衛門の徳をたたえたのでした。

また、寛永^{かんえい}十九年（一六四二）も干ばつのため村の人々は飢^うえに苦しんでいました。この現状を見かねた名主の大多和四郎右衛門（一五九五〜一六四三）は、何度も領主堀田氏^{りょうしゅほったし}に米倉^{たぐわ}に蓄えている米を村人に分けてもらえるように訴えましたが聞き入れてもらえませんでした。

そこで、かねてから尊敬していた市東刑部左衛門にならって領主の米倉を開けて村人に分配してしまいました。



市東刑部左衛門の墓

干ばつ…長い間雨が降らず、水が
かれること。ひでり
ききん…農作物がみのらず、食
物が不足して飢え苦しむこと
年貢…昔、田畑や土地にかけた
税

とはないそうです。



大多和四郎右衛門自刃の地

それから道庭の橋の上で責任を取り長男と共に自殺しました。四十八歳でした。

大多和四郎右衛門が自刃した場所に、「義人大多和碑」と刻まれた小さな碑が建てられています。たが、昭和二十九年（一九五四）に、大きな供養塔が建てられました。今でも線香や花が絶えるこ

自刃…自ら生命を絶つこと

佐藤信淵

大豆谷に「佐藤信淵家学大成地」という碑があります。

明和六年（一七六九）出羽国（秋田県雄勝郡羽後町）に生れた信淵の家は、代々

医者や、学者の多い家系でした。信淵も十六歳で江戸へ出て医学と蘭学（オランダの学問）を学び、天文・地理・暦法・測量・理化学・経済学から砲術・戦術・海防など広く知識や技術を身につけました。いくつかの藩から、財政の立て直しを頼まれたりしました。そして大豆谷の木村久右衛門の世話になり、二十年あまりを過ごすことになりました。

その間に、農民や門人たちに養蜂・養蚕や野菜・果物・菊・綿の栽培、米の



佐藤信淵家学大成地の碑

増収法^{ぞうしゅうほう}などかなり進んだ農業技術^{のうぎょうぎじゅつ}の指導^{しどう}をしました。

今も、幸田や北幸谷で植木作りが盛んなのは、人々がその技術を受け継ぎ更に研究し努力したためではないでしょうか。

大豆谷では、藍葉^{あいば}作りを教え、だんだん作る人が多くなり、それが高値で売れ、貧しかった人々の暮らしが楽になったといえます。

信淵^{かえい}は、嘉永三年（一八五〇）八十二歳で世を去りました。

『東金町誌』によると、佐藤家五代二百年の家学研究をまとめ、数多くの本を執筆するの滞在^{ばんしやうあん}したといわれる川嶋家に「萬松庵」の看板が残っています。

和算家・植松英二郎是勝

和算^{わさん}とは、日本古来の数学で、奈良時代に中国から伝えられた数学^{すうがく}が、江戸時代に算盤^{そろばん}などを使用し、あらゆる計算法と面積や体積の求めかなどまで研究され、算学・算法として発展したものです。各地に和算塾が開かれたり、社寺^{しゃじ}に算法問答^{さんぽうもんどう}の算額^{さんがく}が奉納^{ほうのう}されました。

寛政二年（一七九〇）に上総国山辺郡真亀村^{まがめむら}（九十九里町真亀）に生れた英二郎^{かんせい}は、江戸の和算家関孝和^{せきたかかず}の流れをくむ関流六世日下誠^{くさかまこと}に十一歳で入門することになり、熱心に和算を勉強^{べんがく}しました。

藍葉…布を紺色に染める原料

家学…家に伝わり代々おさめてきた特定の学問



植松是勝の数学書

ついには算法書を二編も書きあらわし、関流七世植松是勝を名のるほどになりました。やがて郷里宿村（東金市宿）へ帰り和算塾を開き、近所の子どもたちを教えたり、よそへ出かけては門人たちに、関流を四十年もの間教えたのでした。

当時の九十九里地域の庶民は、数理にきわめて弱かったばかりでなく、社会一般の風潮として、数学は金勘定を数える卑しい学問として見下される傾向がありました。したがって和算家に対する風あたりも強かったのですが、そういう雰囲気の中で、人々から冷たい目で見られながらも、生活に必要な和算を広めた是勝の功績はきわめて大きいものでありました。

植松家にはかなりの和算書や教具がありましたが、現在八十点ほどが保存されています。

「五瀬植松是勝先生明数碑」が、安政五年（一八五八）に門人たちにより、江戸浅草寺境内（東京都）に建てられました。

安川柳溪（郷土史家・画家）と飯田林斎（画家）

文政二年（一八一九）十月十二日福俵村に生れた柳溪は、幼い時から学問を好み、武術にはげみ、書や絵をかくことが上手な人でした。成人すると岩崎の飯田家に滞在していた、江戸の画家高久靄涯に入門しました。

数理…数学の理論。算数・計算
風潮…時代の移り変わりによって生ずる世の中の傾向



安川柳溪

嘉永二年（一八四九）には、京都や大阪などを巡つて、書家・画家・詩人・学者・思想家などと交際し見聞を広めてきました。日本は変わろうとしており、柳溪も新しい時代をつくるために力を尽くしました。明治の世になり、柳溪は福俵村の戸長に任命されましたが、ほどなくやめて絵をかくことにし、数々の作品を残しました。

また明治七年（一八七四）には、千葉県から頼まれて「上総国誌六卷」をまとめました。その著書「刀祢之河ふね」と共に知られています。

明治二十一年（一八八八）五月の陸軍演習の際、陸軍大将の小松宮彰仁親王が八鶴館に宿泊された折には、自作の絵二点を献上し、ほうびをいただきました。

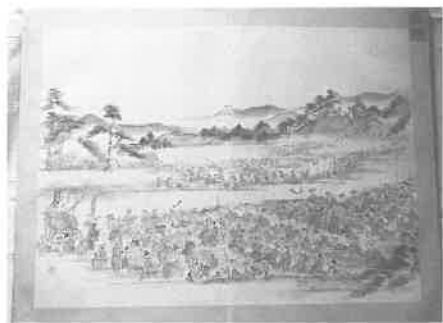
明治三十一年（一八九八）四月二十五日、享年八十歳で亡くなりました。

また、林斎は、文政四年（一八二二）頃に生れたといわれています。天保九年（一八三八）林斎が十七歳の時、江戸の南画家の高久靄涯が東金へ来遊しました。

絵をかくことが好きだった林斎は、二つ年上の安川柳溪といっしょに、靄涯に絵を習うことにしました。二人とも熱心に習ったので、みるみる上達しました。

やがて、世間からは師靄涯に対して「東金靄涯」などとたたえられるようになりました。

林斎のかいた絵はあまり残されていませんが「東嘉園画卷」というすばらしい画



東嘉園画卷（大野茶園）山岡幸子氏蔵

巻があります。

東嘉園とは大野伝兵衛の茶園のことで、この茶園での茶つまから茶葉の仕上りまでの、お茶づくりの作業を、十二枚の絵にかいた画卷です。大村蕉雨や安川柳溪が文を書き入れてある見事な画卷です。

これを見た大野伝兵衛は「その絵は実景に近し」と言つて驚き喜んだそうです。林斎は、明治二年（一八六九）はやり病で、四十九歳のとき亡くなりました。

はやり病…一時的にはやる伝染病

豪商・水野茂右衛門（東金茂右衛門）

江戸時代に、上宿の商店街あたりに、酒としよう油を造る水野家がありました。

全国の分限者番付にのるほどの大商人だったそうですが、くわしいことはわかっていません。ただ、上総地方の特産物の木綿やほしかの商売でもうけたとか、大阪の木綿や紀州和歌山のみかんを買い占めて、丸に水の旗印で江戸へ運んで、蔵を四十人も建てたともいわれていて、紀ノ国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門（材木商）と比べられ、「唐金茂右衛門東髭」という芝居にもなったといわれています。

また、東金近辺だけでなく、房総の各地でもその生活ぶりが盛んにうたわれ、

「街道通るは大名じゃないか、あれは茂右衛門嫁御寮」（東金甚句）

「我が町にも名も高き、茂右衛門とて分限あり」（東金名所歌）

豪商…財力の豊かな大商人のこと

分限者…大金持ちのこと

ほしか…いわしで作る肥料

「今日も行こかよ茂右衛門屋敷、蔵の千両箱積みかへに」(東金民謡)

などが、現在も伝えられています。

水野家は代々茂右衛門を名のつていたようですが、詳しいことはよくわかっていません。一族の墓が本漸寺と、日吉神社表参道の近くに残されています。

豪商・大野伝兵衛(八代目)

大野家は、東金でも名高い家がらであり、代々伝兵衛を名乗っていました。六代目(秀澄)の頃、一角丸(小児用の漢方薬)を売り出し、豪商と呼ばれるようになり、苗字帯刀を許されました。これは、当時の商人としては最高の名誉でした。

その後も代々家業を発展させ、天保元年(一八三〇)に八代目伝兵衛(秀頼)が生まれたところが、一番盛んだったといわれています。

安政五年(一八五八)に、江戸でコレラ(伝染病)が流行し、多くの人が命を失いました。ころりと死んでしまうほどなので、「コロリ」といって恐れられたのです。

その時、大野家では、家伝薬の「折衝飲」という胃腸薬を大急ぎで江戸まで運んで、無料で提供して人々の命を救う手助けをしました。コレラの流行がおさまった時、大野家は江戸町奉行所から白銀十一枚を授かり、その行いをほめたたえられました。大野家では世の中全体を良くするために、分に応じた奉仕をしようという



大野一角丸の看板

苗字帯刀…江戸時代平民が姓名乗、刀を腰につけることを許されたこと



水野家一族の墓

気分がありました。

文久元年（一八六一）三十二歳になった伝兵衛は、これまで東金に無かった産業を起こそうと考え、製茶業に取りかかりました。

そのころ製茶業の盛んだった京都の宇治へ行つて、茶の木の手育てかたや、茶葉のつくりかたなどを研究したのです。帰りには職人たち三十人ほどの男女をやとつてきて、地元の人たちから働き手を募集して、鶴ヶ嶺一帯の台地を茶畑にしました。茶畑は二十ヘクタールにもなり、三百人の女たちが働いたそうです。伝兵衛は広い茶園を馬に乗つて見回るのが楽しみだったようです。

東金の茶は、たいへん味も香りも良いことから評判になり、有栖川宮熾仁親王から「東嘉園」という名をいただきました。明治になって、外国と貿易が出来るようになると、大野茶園の茶もアメリカへ輸出されるようになりました。

しかし、明治六年（一八七三）千葉県が茶と漁業を奨励すると、県内での茶の生産は増えましたが、次第に外国にあまり茶が売れなくなり、大野茶園も売り上げが減り、働き手へ支払う給金などで悩まされました。伝兵衛は疲れはて寝こむようになり、明治九年（一八七六）七月二十九日、雨降りしきる日に、四十七歳で亡くなつてしまいました。

大野家では、明治二十年頃には製茶業はやめてしまい、もとの薬種業にもどつたようです。



有栖川熾仁親王自筆の額

奨励…すすめ、はげますこと

開拓に生きた医師・関寛齋



関寛齋の銅像

天保元年（一八三〇）二月八日、山辺郡中村（東金市東中）の農家吉井家に父佐兵衛、母幸子の長男として生れ、幼名を豊太郎（とよたろう）といったのが、後の関寛齋（務・寛・致道・白里）です。

寛齋が二歳の時、母幸子が病死したので、十三歳で近くの前之内村に住む母の姉夫婦の養子とな

りました。

養父の関素寿（俊輔ともいう）という人は、製錦堂という漢学塾の先生で、かざり気のない親孝行な人でしたが、その教育はかなりきびしく徹底したものでした。

この素寿より、「人の道」「仁の心」「記録の大切さ」「人の世話になるな」等を教えられた寛齋は、十八歳の時医師を志し、佐倉の蘭医佐藤泰然の順天堂に入って五年間、名を『務』と改め、「医の本質」「生命の大切さ」「努力の尊さ」は言うまでもなく、「友との交際」を深めながら、泰然の治療助手として修業しました。嘉永五年（一八五二）二十三歳の時に、順天堂を出て郷里の前之内村に帰った寛齋は、君塚あいと結婚しました。その後、先輩三宅良齋が佐倉藩医となったため、その後任として銚子に開業することになりました。

蘭医…オランダ伝来の医術。
またその医者

銚子はにぎやかで、活力もありました。ここで浜口梧陵と知り合った寛齋は、梧陵から、長崎遊学を強く勧められたのですが、養父の素寿から「人の世話になるな」と教えられていたため、大変なやみました。結局この厚意をうけて、長崎にきていたオランダ人の名医ポンペに一年あまり弟子入りをし、「人間の尊厳」「平等」「医師・病院のあり方」を学び、蘭医として大成して銚子に帰ったのです。

銚子へ帰った寛齋のもとへ、越前（福井県東部）福井藩より医学生が勉強に来ますが、ポンペの講義や身につけた医業をこと細かに教えたといっています。

文久二年（一八六二）十二月一日、三十二歳の時、順天堂で指導してくれた須田泰嶺は、寛齋を徳島藩主蜂須賀斉裕の侍医に推せんしました。

侍医となった徳島でも、その人柄と誠意のこもった診療は深く信頼されたといえます。

やがて、慶応四年（一八六八）軍医として戊辰戦争に参加、奥羽出張病院頭取を命ぜられました。その後も、徳島藩医学学校附属病院長に任命され、この間名を『寛』と改め、山梨病院長となりましたが、明治六年（一八七三）四十三歳の時、徳島で開業して町医者に戻り、「医は仁術」を実践し、人々をわけへだてなく治療しました。人々は「関大明神」としてあがめ、今も徳島県徳島市中徳島町の道に、「関の小路」の愛称が残されています。

明治三十四年（一九〇一）の金婚式を祝った年、寛齋の七男又一は卒業論文「十

尊厳…尊く、おごそかなこと



奥羽出張病院の旗

金婚式…夫婦が結婚五十年を祝う式

勝国牧場設計」を発表し、寛齋の新しい夢である北海道開拓^{はつかいどうかいたく}をとともに着手することになりました。

寛齋が北海道の斗満^{とまむ}に入ったのは、七十三歳の明治三十五年（一九〇二）八月十日といわれています。

徳島を出る時、妻と二人で野外生活を経験していましたが、北海道には、さらに熊の害・毒虫^{どくむし}・蛇^{へび}・野兎^{のうさぎ}とねずみの大群・冬の酷寒^{こっかん}・風雪害等がありました。

妻あいは体調を崩^{くず}し、斗満の原野を見ることなく、札幌で明治三十七年（一九〇四）に亡くなりました。夫寛齋と子又一の開拓への考えの違いを心配し、葬式は出さず、骨は良人（夫）とともに牧場に埋め、草木のこやしにしてほしいと遺言を残しました。

その後寛齋は、北海道で二宮尊親（尊徳の孫）の二宮牧場を視察したり、東京の徳富蘆花^{とくとみろか}をたずねたりしました。

しかし、七男又一との、関牧場についての意見の違いや、他の子どもたちとの遺産争いなどから、大正元年（一九一二）十月十五日、母を慕^{した}い、妻を偲^{しの}び、共に働いた人々を思いながら、一服の薬を飲み、自ら命を絶しました。八十三歳でした。

二宮尊徳^{にのみやうんとく}…江戸時代末期の熱心な農業の研究者。金次郎ともいう
徳富蘆花^{とくとみろか}…小説家

偲ぶ…なつかしい気持ちで、思い出すること

力士・高砂浦五郎



高砂浦五郎の力士絵

天保九年（一八三八）大豆谷村に生れた山崎伊之助（後の浦五郎）は、幼い時から力じまんの人並みすぐれた体つきで、田舎相撲では「磯千鳥」のしこ名で知られていました。

阿武松庄吉に入門し、東海大之助と名のり、初土俵をふみました。

当時の相撲取りは、大名に面倒をみてもらい生活していました。彼は姫路藩主酒井氏のおかかえ力士となり、地名にちなんで、高砂浦五郎のしこ名まで賜りました。しかし、明治になると版籍奉還などで、大名もお抱え力士の面倒をみるだけの経済的余裕がなくなり、力士は失業してしまいました。

そこで浦五郎は収入を得るため、回向院の境内をかりて春秋二回の興行をしたり、地方巡業を行なったりしました。

明治十年（一八七七）には東京相撲協会を設立して角界の近代化につくしました。引退後は高砂部屋を創設して、力士の養成につとめました。

明治十七年（一八八四）には先祖と両親の供養塔を大豆谷を見おろす高台に建立しています。

しこ名…相撲の力士の呼び名

版籍奉還…全国の大名が土地と民を朝廷に返したこと

興行…しばいやすもうなどで、お金をとって人に見せること
角界…相撲の世界。「かつかい」ともいう

明治三十四年（一九〇二）四月八日、六十四歳で亡くなりました。墓は、
深川^{ふかがわ}の円隆院にあります。東京^{とうきょう}